

北方民族について

北方民族から見ると、南に漢族、その南に江南人がいた。
北方民族は昔、文字を持たなかったたので歴史がはっきりしない。

【北方民族】

匈奴

秦

【中国王朝】

… は北方民族

鮮卑

(トルコ系)

前漢

○匈奴は漢と敵対し、唐の頃にはいなくなった。

後漢

○北魏・東魏・西魏・北斉・北周・隋・唐はすべて

柔然

(モンゴル系)

北魏

南朝

鮮卑の拓跋部に属する非漢民族政権である。

突厥

(トルコ系)

隋

つまり遊牧系武人の伝統・体質が色濃い。

回鶻

(ウイグル)

唐

○柔然じゅうぜんは拓跋部に属したが、のち長を可汗と称して

契丹

(遼モンゴル系)

宋

モンゴル高原を領したが突厥に滅ぼされた。

女真

(満州ツングース系)

金

南宋

○突厥は唐に滅ぼされ、回鶻(ウイグル)がモンゴル

韃靼

(タタール・モンゴル系)

元

明

高原を支配した。

女真

(満州人)

清

○王のことを、漢人は皇帝とよび、匈奴・鮮卑は单于、柔然・突厥は可汗、モンゴルは汗とよんだ。

◆ 匈奴とは

きょうど

匈奴は騎馬人である。人間が馬にじかに騎のるといふ技術を考えたのは、紀元前八世紀から同三世紀ごろまで黒海沿岸の草原で活躍していたスキタイらしい。

スキタイは目がくぼんで隆鼻のイラン系民族である。

このスキタイの騎馬技術が中央アジアの草原で牧畜をしている諸民族に影響を与え、東へ進みモンゴル高原(平均標高一五八〇米)の民族をスキタイ化し、ついに大騎馬団をもって中国史に出現(紀元前三一八)したのが匈奴である。

匈奴がどういう人種であるかは、よくわからない。漢字に音が移される言葉の片鱗からみればモンゴル人であり、その体型について表現されるところではスキタイのような白人に似、あるいはモンゴロイドの一派の古代トルコ人ではと言われる。

「モンゴル紀行 司馬遼太郎 朝日文庫」

スキタイは騎馬遊牧民として紀元前から、黒海沿岸から南シベリヤ、中央アジアの草原に分布していた。

ペルシャ帝国のダレイオス一世(在位・前五二二〜前四八六)をもってしても、征服することができなかった部族である。古代ギリシャの歴史家ヘロドトスがスキタイをこう評して

いる。

「町も城壁も築かず」「その一人残らずが家を選んで移動してゆく」「騎馬の弓使いで」「種もまかず耕すすべを知らない」「生活は・・・家畜に頼り」「ペルシャ王が・・・向かってきた場合は・・・逃れつつ・・・撤収しペルシャ王が退けば追跡して攻める」

漢の歴史家司馬遷が匈奴について同じことを書いている。しかも、スキタイや匈奴は文字を持たず、歴史を記録することはなかった、と。

「興亡の世界史2 スキタイと匈奴 遊牧の文明 林俊雄 講談社」

匈奴は南の漢民族と敵対していたが、紀元五〇年ころつまり、後漢のはじめに匈奴内の争いにより南北に分裂した。南匈奴が漢に帰属した。牧畜を主とした生活は急速に中国化した。

北匈奴は、九一年に後漢と南匈奴の連合軍に敗れ、モンゴル高原から西方にのがれた。

四世紀中頃からさらに西進を始めた。これが「フン族」と呼ばれる。

フン族はクリミヤ・カスピ海に進出したため、ゲルマン民族の西ゴート族がドナウ川を渡ってローマ帝国に移動したのをきっかけに、ローマ帝国は東西に分裂し（三九五年）、バルト海付近にいたゲルマン人の諸民族が次々とローマ帝国領内に入り、各地に国家を建設した。

フン族はアッチラ大王のもとで勢力を拡大し、現地のゲルマン人やスラブ人を従属させ大帝國を建設し、シリアに侵入した。四二二年、東ローマは、毎年三五〇ポンドの金きんをフン族に支払う条件で和平条約を結んでいる。

ガリア（北フランス）に軍を進めたため、そこにいる西ゴートと西ローマは連合しフン族と戦い、両軍ともに大損害を出して、アッチラは本拠地のハンガリーに戻った。

翌年イタリアを目指して西進したが、ポー川の平原まで来てローマ教皇レオ一世との会見後、なぜか本拠地へ戻った。しかし西ローマ帝国は滅亡してしまう。フン族は東ヨーロッパにフン帝国を建て、一時的にはコンスタンチノープル（今のイスタンブール）を脅かした。

フン帝国はアッチラの死後、五世紀中頃に瓦解したが、七世紀にブルガル汗国（ブルガリア人・ポーランド人）を建てている。（ブルガル人はフンの末裔といわれる）

匈奴の古い中国語読みはフンヌである。ハンガリー人の子供には今も、尻に青い蒙古斑が出るという。ドイツ人はこれをモンゴリアン・プンクト（点）という。

「中国史のなかの諸民族 川本芳昭 山川出版社」

◆「鮮卑」はトルコ系であるが、もともと大興安嶺の北部、今の黒竜江省に住んだ遊牧民族で漢民族と接触したのは遅かった。

（京都大学の川勝義雄教授は、鮮卑はモンゴル族だと考えるのが最近の定説であると著書「魏晋南北朝 講談社学術文庫」の中で述べている）

同族に烏桓ウガンがいて後漢の時代には匈奴と同様、遼河の西岸に至る一帯にいたが、一世紀末に

匈奴が衰えると、鮮卑は代わってモンゴル高原に進出して二世紀の末に民族を統一して、東は遼河から西はアルタイ山脈に及ぶ大帝国をつくった。

鮮卑の一部族慕容部ぼようの建てた前燕、後燕、拓跋部たくばつの建てた北魏（中国北部を統一した）などが、中国北部に南下したため、五世紀のモンゴル高原には「柔然」じゅうぜん（モンゴル系）が移動してきた。

これで中国は北から順に、柔然、北魏、宋（南朝）と三層に区分された。六世紀には柔然に服属していたトルコ系の「突厥」とつけつが力をつけて、柔然を滅ぼしモンゴルからカスピ海までの大帝国を建て、南の唐と争った。

◆「ツングース」（固有満州人）とは狩猟・牧畜を生業とする民族で、満州と呼ばれた大平原地帯で活躍した。中国史には隋唐の「靺鞨」まつかつ、宋以降は「女真」じょしんと呼ばれている。

なかには高句麗や渤海という強大な国家を建設した。これら諸族は基本的には万里の長城を越えて南下することはなかった。

（ツングースは狩猟のほか農耕もおこない、麦、粟、ひえなどの耕作もするが、副業として豚を飼う。トルコ語で豚を意味するトングズの訛ったものがツングースなのである）

北東の盛国と称された渤海国（ツングースの靺鞨が建国）が遼（契丹族の耶律阿保機が建国）によって亡ぼされたのち、再び女真という名のもとに結集し、金国を建て会寧（満州吉林）を首都として、宿敵たる遼を滅ぼす。さらに北宋の打倒へと展開する。

しかし、元の軍事力に圧服した時代にも、女真族の結集は存続し、明のあと清として興隆する。今日、その大部分はシベリヤと極東地域に住む。

◆「ウイグル」は、はじめモンゴル高原、のちトルキスタン方面に移住したトルコ系民族の一つ。現在は中国の新疆ウイグル自治区と旧ソ連の中央アジアを主たる居住地とする。人口は中国に七〇〇万人、旧ソ連に二十万人。

◆「モンゴル」について。

中国の周辺国家というのは、ことごとく中華の風を慕い、中国文明をとり入れた。朝鮮とベトナムにおいて、もつとも濃厚で、日本もその例外でない。

もつともひどいのは東胡系ツングースの半農半牧の異民族で、かれらは五胡十六国の時代以来、中国に侵入して国を樹てることしばしばで、ときに満州から出た金帝国のように強大な国を樹て、さらに清王朝までつくったが、すべて中国文明に同化し、民族そのもののまでが漢民族の中に溶けはててしまった。

ところがモンゴル人のみが例外なのである。かれらは古来、中国文明をまったくといっていほど受けつけず、むしろ姓をつける真似もせず（モンゴル人に姓はない）、衣服その他の風

俗を変えず、かれらは大陸内部で元帝国をつくったが、そのときも中国文明を拒絶した。

元帝国がほろぶと、温暖の中国に愛着をもたず、さっさと集団で北方の地へ帰った。

モンゴル人は土地を掘り起こす農耕を卑しむのである。

モンゴルが世界帝国を作り得た理由の一つに、遠征のとき一兵士は替え馬を十〜十五頭引き連れて進軍したため攻撃の迅速性があったためである。

「モンゴル紀行 司馬遼太郎 朝日文庫」

元は中国ではない。中国社会への同化を志向しなかった。元は異民族の征服王朝であって、モンゴル語・モンゴル文字の公用語化、政治の官僚には一族譜代の重用、身分の区別に上から、蒙古人、色目人、漢人、南人（南宋人）の四つをつくって、待遇に差をつけた。また科挙を廃止したことは、儒教的教養人を締め出した。

「中国史のなかの諸民族 川本芳昭 山川出版社」

遠征軍の食料

モンゴル軍の遠征には、「歩く食料」として羊が連れていかれた。そのルートは草原と水場を結んだコースを選び、各軍団が分かれて進軍した。また保存食を携行していた。牛の赤身の肉を冬の低温で二年間乾燥させ、水分を抜いたうえで槌でたたいて繊維状にし、さらに臼で突き固めて圧縮したものである。遠征には、これを牛の膀胱に詰めて携行した。湯を注ぎ入れ数倍に膨らませて食べた。一つの膀胱の袋には、牛一頭ぶんの赤身が入り、十人の兵士の三週間ぶんの食料になった。

「詳説 世界史研究 木下康彦ほか 山川出版社」

騎馬民族は多くの馬群を管理するために、馬の去勢技術を重要視した。

牡馬は発情期になると、牝争いをはじめて群れは分散してしまう。群れを保つために、モンゴル、キルギス、カザフ、コザックなど騎馬民族のほとんどは、本当の牝馬に乗り、牡馬は繁殖用の種馬と狼狩りに使う。

（オヤジ馬は牝ばかり追いかけてまわすので、それがヤジウマの語源だという）

「騎馬民族の源流 豊田有恒 徳間文庫」

◆モンゴル人の血はインドにまで及んでいる。

チャガタイ・ハン家（モンゴル族）に生まれたチイムールは、一三七〇年にチイムール朝を創設して、中央アジア全域の支配権を握り、一四〇一年にダマスクスを略奪し翌年にはオスマン朝軍を破り、南は北インドにいたる大帝國を建てた。

チイムールの五代目子孫でチンギスハンの血を引くバーブルは、中央アジアから南下して、一五二六年にインドのデリーに入城して、ムガル帝国を創始した。その後三三〇年間続

いて、一九世紀に英国領インドになった。ムガルはモンゴルの訛りである。

◆西域の河西四郡

紀元前百年ころ前漢の武帝は外征して匈奴を北に追い払うことに苦戦していた。外征して匈奴に敗れた李陵將軍をかばったことで、司馬遷が失脚したのもこの頃のことである。

匈奴の制圧に大いに活躍したのは、將軍衛青（武帝の皇后衛氏の異母弟）や霍去病（衛青の甥）である。この二人は、これまで甘肅省の西北に拠っていた匈奴との戦いに何度も勝利し、武帝はこの地域に武威・酒泉の二郡を新設した。後にこの二郡を割って張掖・敦煌の二郡を増設し、これを河西（黄河の西）の四郡と称していた。そして地方を鎮め護る軍事拠点を都護府とした。

◆三世紀ころ、地球規模の寒冷化がつづき、北方民族は南下をはじめた。

これに合わせて、各国が乱立して争ったとき、漢のあとの混乱した五胡十六国・南北朝時代を終わらせたのは、のちの隋・唐帝国の母胎となった「北魏」である。

北魏の孝文帝（六代）は名君といわれ、胡族・漢族をあわせた身分秩序を築いたり、都を平城（大同）から南の洛陽に遷都した。朝廷に漢語の使用、胡族の姓を漢民族の姓に改めさせ（たとえば拓跋氏の姓を元氏に改めた）、胡服を漢服とすることを定めるなど「漢化政策」を進めた。ただし、軍隊では、号令は鮮卑語であったし、軍服は胡服のままであった。

北魏の北方で、新たに台頭した遊牧民族の柔然の防衛のため、六つの辺境に軍鎮をもうけて州に相当する地方行政区をおこなわせた。その一つが武川鎮である。平時は遊牧や農耕をおこない戦時には兵となるのである。武川鎮には楊氏（のちの隋を建国）や李氏（のちの唐を建国）がいた。武川鎮は現在の内モンゴル自治区の首都フフホト（呼和浩特）の北方にあった。

北魏の孝文帝が「漢化政策」を進めて南下すると、六鎮への待遇が急に悪化したため、反乱がおこり、北魏は東魏と西魏に分裂する（五三五年）。多くの六鎮將兵と家族が南下して東魏に入って漢人貴族と手を結んだのに対し、武川鎮は西魏に入り在地豪族と手を結んだ。西魏は宇文泰がリーダーで首都は大興城（のちの長安）である。

ここを基盤にして、北周の宇文氏、隋の楊氏、唐の李氏が政権の座につくのである。西魏・北周の実権者は鮮卑族の宇文、独孤、長孫の部族などである。

隋の文帝（楊堅）の父楊忠の身長は二メートルに及び、しかも彫りの深い顔であったのでコークソイド（トルコ系）の血が混ざっているといわれる。

文帝は父の勲功により隨・国公になった。「隋」の国号はこれより、しんによるを取り除いた字である。

文帝の妻の独孤皇后は非常に優れた女性であった。この妹が唐の高祖李淵の母である。

唐の二代目太祖（李世民）の妻は長孫無忌の妹であり、その九子が三代皇帝の高宗である。父の太宗は四子を皇太子にしようとしたが、長孫無忌が妹の生んだ九子を強く推薦したため、鮮卑の血が継がれたのである。長孫無忌は政府の吏部尚書として（また唐律を定めた）、褚遂良とともに高宗を助け活躍したが、高宗が父の後宮にいた武昭儀（のちの則天武后）を皇后としたいと言った時に、褚遂良とともに反対したために左遷された。

これは中国の官人にしみ込んでいる儒教の精神において反対したのである。しかし、北方遊牧民の風習では良くあることなのである。父が死んだあとその嫁、妻女を息子が引き取るのは、遊牧民的な相互扶助の風習であった。兄が死んでその嫁を弟が引き取る、さらにその弟が引き取ることは、何の問題もなかった。

古くは漢の王昭君が匈奴の呼韓邪こかんやぜん単于に嫁ぎ男子一人を産み、呼韓邪が死ぬと、息子が次の単于となり、匈奴の風習としてその後となり二人の娘を生んでいる。この風習は「レビレート婚」と呼ばれ、遊牧民の風習である。

また、隋の煬帝が殺されて蕭皇后は突厥の可汗に引き取られている。唐の玄宗が息子の嫁を取り上げて自分のものにした楊貴妃は、これの逆である。

「シルクロードと唐帝国 森安孝夫 講談社学術文庫」

「教養の中国史 津田資久ほか ミネルヴァ書房」

◆漢が亡びたあと、三国時代、西晋、東晋から、北の五胡（匈奴、羯、鮮卑、氐、羌）、南の六朝（呉・東晋を含む健康（南京）を都とした六国）と目まぐるしく国々が興亡する。

覚えにくいので、ひとまずの目安として、三世紀は三国・魏・晋の時代、四世紀は東晋の時代、五世紀は南朝の宋・齊の時代、六世紀は梁・陳の時代、七世紀以降、隋・唐となる。

漢が亡びて隋の中国統一（五八九年）まで四〇〇年である。

南北朝を統一した隋は郡を廃して州とし、その下に県を配した。州には都護または刺史ししを置いた。大事な州においては都督をもつて刺史を兼ねさせた。

隋は、北東の高句麗（満州東南部に起こったツングース族とモンゴル族の雑種）の征討を三度にわたって失敗し、突厥とつけつが北辺を脅かし始めたため、国力が疲弊し二代目の楊帝の圧政もあって国民の不満が高まった。

山西省の太原地方たいげんの「留守りゅうしゅ」の司令官であった李淵りえん（煬帝と表兄弟いとこ）が兵をあげ、三万の軍隊を率いて長安に向かい、三カ月後には二十万の軍になって長安に入城し、表向きは煬帝を尊んで太上皇とし、長安にいる煬帝の孫を帝位につけて実権を握り、煬帝が部下の親衛隊

長に絞殺されると、十三歳の三代目の幼帝から帝位を禅譲させて李淵が帝になった。隋はわずか三代、三十七年で滅んだ。

隋とは姻戚関係にあった李淵（高祖）が唐朝を開き、初代の皇帝となったが（六一八）、実は子の李世民（太宗）の力に負うところが大きかった。

しかし彼には兄がいたので皇太子ではなかった。父も李世民には一目置いていたから、唐の宮廷には皇太子派と李世民派の対立が生じ、李世民は皇太子である兄と弟をクーデターで殺すことに成功し、父高祖（李淵）を幽閉した（玄武門の乱）。その四日後、父は李世民に譲位した。二代目太宗である。唐の李家は武川鎮の出身で、北方民族の血を継いでいる。

（高祖の母は独孤氏「トルコ系鮮卑族」であり太宗の皇后は宇文泰の孫である）

◆唐の異民族統治

唐と長城線を挟んで対立していたのは、トルコ系の東突厥であったが太宗（二代目）は、をゴビ砂漠の北にまで出動させて、これを滅ぼした。

さらに青海にいた吐谷渾、チベットの吐蕃を勢力下におさめた。現在の東トルキスタンの新疆ウイグル自治区）は西突厥の勢力のもとにあったが、これを降し六四〇年トルファンの高昌国を滅ぼし、タリム盆地のオアシス国家、焉耆（カラシャル）、龜茲（クチャ）、疎勒（カシユガル）、于闐（ホータン）を帰順させた。こうして太宗により、唐の世界国が形成された。

唐はこれらの地域に六つの都護府を置き、中央から長官として都護を派遣した。太宗の子高宗（三代目）のとき、高句麗を滅ぼして、隋以来の朝鮮問題を解決した。

占領地には、異民族の首長を世襲の長官に起用して、漢人の都護が都督府を置いて間接的に統治する羈縻政策を実施した。（羈は馬の手綱、縻は牛の鼻綱のこと）。

当初、羈縻州は七つであった。地方の統治は全国を十の道に分け、その下に州・県を置いた。重要な州を「府」と呼んだ。

◆中国は、征服した異民族の君主を温存して、官職の世襲を認める一方でその嫡子や家族を人質として、長安に住まわせた。

中国の皇帝が爵位や官職を与え、皇帝と君主のあいだに君臣関係を結んだ。

（これを君主を冊封するという、君主は朝貢の義務があった、そして周辺との紛争が起きたときは中国が外交・軍事の両面から鎮定・平定にのりだした）

唐はその後、東突厥、突厥の北方の鉄勒をも破って羈縻州をおき、（突厥の指導者を州の長

官に任命）、東方の契丹にも羈縻州を置いた。さらに西突厥は西モンゴルから東西トルキスタンにわたる広い地域を持っていたが、ここも侵略して羈縻州にした。

唐の領土拡大による世界帝国の完成によって、羈縻州はたいへんな数になった。唐の内地の州が三五〇くらいなのに、外の羈縻州は八五六もあった。したがって異民族の長官が多くなったので、これらを統括する機関として「都護府」を置き、唐人を最高責任者の都護とし、軍隊が駐屯して監視をしたのである。

玄宗の頃になると、唐初からの諸制度は建国百年たって機能しなくなり、再び北に突厥、西に吐蕃が台頭してきた。

周辺民族の勃興に、唐軍は大軍を動かさざるを得なかった。そこで六七七年、唐は府兵（首都と辺境を守る兵）に加えて、募兵を行った。募兵は本来ならば、戦いが終われば故郷へ帰れるはずであった。ところが外民族の抵抗は兵を辺境に釘づけにした。いわゆる北魏の軍鎮、唐の節度使がそれである。

節度使一、行軍司馬一、参謀若干名、判官二、掌書記一、従軍四である。この下に軍隊を配置した。他にも、いくつかの軍鎮を一括して指揮する方面軍司令官を節度使とした。節度使は軍事・政治の両権を持つ地方の権力者である。

都護Ⅱ漢から唐代に、辺境の軍・行政をつかさどった。

刺史Ⅱ漢では郡守につぐ地方官。後漢から牧といった。唐の玄宗のとき刺史を太守と改めた。

宋からは知府・知州とよんだ。

節度使Ⅱ唐代、地方長官で軍・行政をつかさどった。

◆ここで辺塞詩によって、出征させられている兵士の気持ちを詩句でみてみよう。

王翰の 涼州詞 酔臥沙場君莫笑 古来征戦幾人回

王之涣の 涼州詞 羌笛何須怨楊柳 春光不度玉門関

岑参の 磧中作 今夜不知何処宿 平沙万里絶人烟

曹松の 己亥歲 憑君莫話封侯事 一将功成万骨枯

常建の 塞下曲其二 勣體尽是長城卒 日暮沙場飛作灰

陳陶の 隴西行二首 可憐無定河辺骨 猶是春閨夢裏人

（故郷の妻は夫の帰りを夢みる）

杜甫の 兵車行 古来白骨無人収 新鬼煩冤旧鬼哭

◆出征軍人の妻の歎きは、しばしば詩題となった。

つぎの女性の詩は、絶句は字の重複を忌むのが原則だが、この詩は妾を三回、夫、辺、到をそれぞれ二回用いている。このためかえって情感がにじみ出ていると言われる。

「寄夫」

（夫に寄す） 陳玉蘭 （ぎょくらん）

夫戍辺関妾在呉

夫は辺関を成り妾は呉に在り

西風吹妾妾憂夫

西風妾を吹き妾は夫を憂う

一行書信千行淚

一行の書信千行の涙

寒到君辺衣到無

寒は君の辺に到るも衣は到れりや無や

つぎの李白の子夜呉歌の詩は良く知られている。

「子夜呉歌」

（子夜呉歌） 李白 （しやごか）

長安一片月

長安一片の月

萬戸擣衣声

萬戸衣を擣つの声

秋風吹不尽

秋風吹いて尽きず

總是玉関情

総べて是れ玉関の情

玉関Ⅱ玉門関 西域の関所

何日平胡虜

何れの日にか胡虜を平らげて

胡虜Ⅱ匈奴をさす

良人罷遠征

良人遠征を罷めん

◆西域の節度使について

長安から西の蘭州に至って黄河を越えると河西（漢代から）と呼ばれる。今の甘肅省、青海省である。この敦煌方面に置かれたのが河西節度使であった。

突厥や吐蕃との対決のため、玄宗のときの天宝初年の兵力は七万三千人、軍馬は一万八千八百匹だった。その管轄下の一つ、敦煌の豆盧軍については、兵四千五百人、馬四百匹であった。このときの敦煌は四千二百戸、人口一万六千の町であった。

ここから西八五〇キロの龜茲に安西節度使を置いた。この西隣はキルギス、タジキスタンである。この安西節度使の兵力は二万四千、馬二千七百であった。

唐代の重要な詩人で実際に西域に入ったのは高適、岑参、李益くらいで、玉門関を遥かに超えたのはおそらく、岑参しんじんただ一人であろう。しかも彼は二度も安西都護府の役人となり、それぞれ足かけ三年滞在した。当時の安西都護府は龜茲きじすなわち庫車の辺りにあり、彼はさらに北庭（ウルムチの北）にも勤務した。したがって彼の詩は迫真的である。

「磧中作」

走馬西来欲到天

（磧中の作） 岑参 磧中Ⅱ石の多い沙漠
馬を走らせ西に來りて天に至らんと欲す

辞家見月兩回圓

家を辞して月の兩回圓まどかなるを見る 兩回Ⅱ二カ月間

今夜不知何處宿

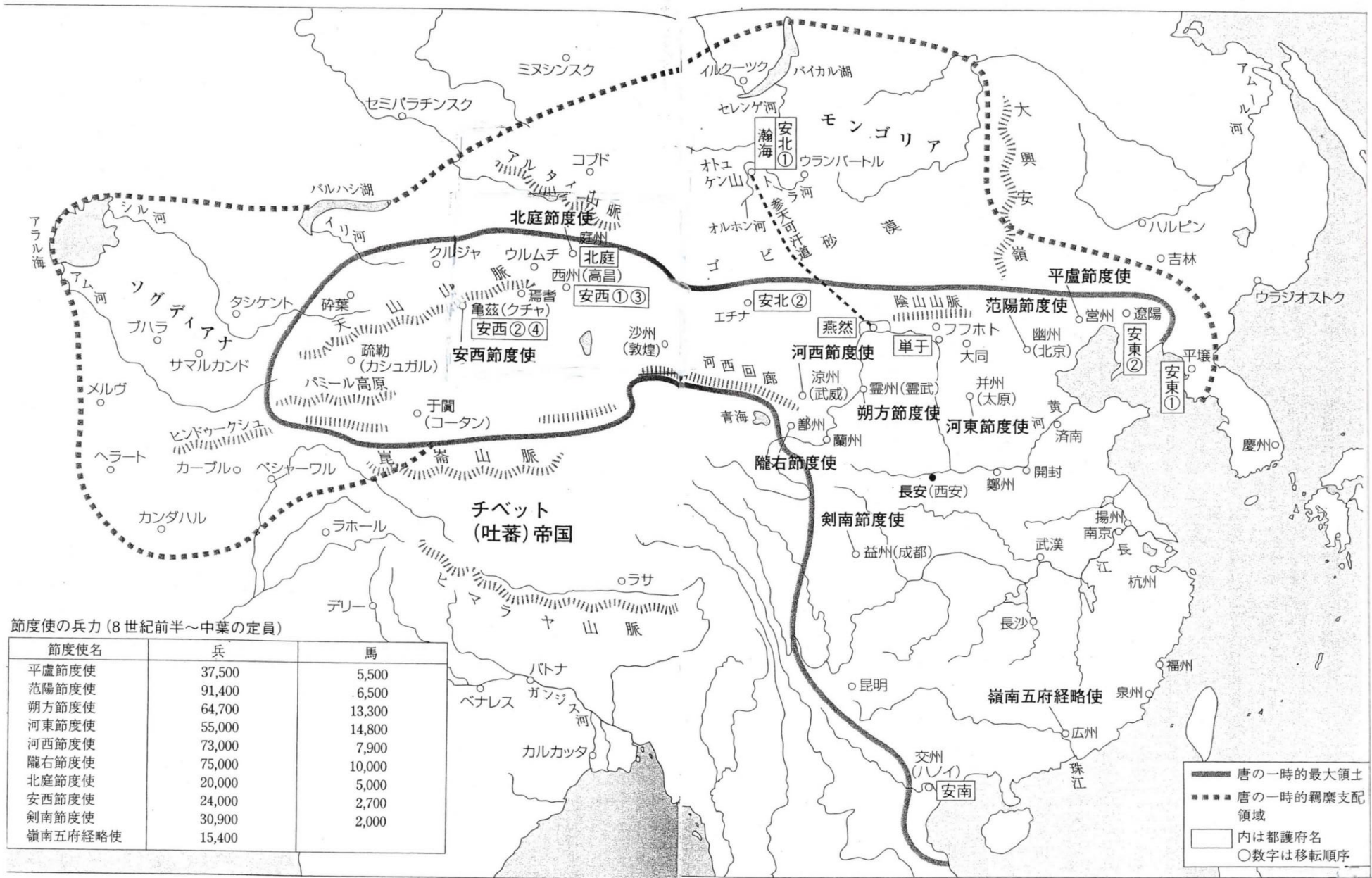
今夜は知らず何れの處にか宿するを

平沙萬里絕人煙

平沙万里人煙を絶つ

この涼州は一時吐蕃に奪われたことがあった。吐蕃に対して唐の太宗（二代目）は文成公主を嫁がせ、初期は良好な関係が保たれた。玄宗（六代目）が即位すると武力で吐蕃を封じ込めた。安祿山の乱によって、西域の唐の軍隊が東に移動したのに乗じて、吐蕃は長安に突入した（七六三）。涼州以西の河西四郡は吐蕃の勢力範囲となり、シルクロードの商権をおさえた。そして、吐蕃との協定により安西都護府は廃止された。しかし九十年後の八五一年に敦煌の張議潮が吐蕃を追放して涼州はすべて唐に復帰できた。

◆節度使の配置は次の図に示される。
この図は、「シルクロードと唐帝国」森安孝夫 講談社学術文庫」よりの拝借です。





◆「遼」と「金」は北方民族である。

唐帝国が亡びると東北アジアにはモンゴル系の契丹（キタイともよばれる。ロシア語で中国のことをキタイという）によって建てられた遼国が生まれた（九一六）。

契丹の遼王朝は国家的基盤がしっかりしていて二百年続き、宋王朝と対等以上の交渉力をもった。中国は以前から全世界から朝貢を受けていたが、このようなことは中国歴史上はじめてであった。

かれらは半遊牧民族である。満州の中部から北部にかけての強国「遼」は中原を狙っていたその遼の北の荒野には女真族（ツングース族・狩猟民族で東部の領土は森林地帯である。遼の領土の草原地帯とは異なる地方である）が新興の国家を誕生させていた。「金」である。女真の金王朝は百二十年続く。

唐が滅んだ後にでてきた北方民族の遼と金は、中央集権国家を作ること成功し、中国を圧迫し、領地を侵略し長年にわたり中国北部を占領した。

遼・金の南では、五代の後周王朝の武将であった趙匡胤（宋の太祖）が南唐軍を大敗させた戦功により、近衛総指揮官と帰徳節度使（汴京）の兼務となった。その後七歳の幼帝から、皆に推挙されたという形をとって帝位を奪った。「宋」の太祖である。

この皇帝によって唐のあとの五代の六十年間の戦乱が収まり、ひいては貴族政治が除かれ、兵権が皇帝に帰して、宋朝は天子独裁の確立に成功した。宋はこの後、「元」に滅ぼされるまで、南宋も含めて三百二十年続く。

「大唐帝国 宮崎市定 講談社学術文庫」

「隋唐帝国 布目潮風ほか 講談社学術文庫」

「中国通史 堀敏一 講談社学術文庫」

「敕勒歌」

（敕勒の歌）

斛律金（鮮卑族の武将。鮮卑の歌を漢語に訳した）

敕勒川

敕勒の川

敕勒Ⅱトルコ（チュルク）を音訳した漢字で

陰山下

陰山の下

鉄勒とか突厥などと書かれた。

天似穹廬

天は穹廬に似て

穹廬Ⅱドーム型のテント。ゲル。パオ。

籠蓋四野

四野を籠蓋す

籠蓋Ⅱかごをかぶせるように掩う

天蒼蒼

天は蒼々

野茫茫

野は芒々

風吹草低見牛羊

風吹き草低れて牛羊見る

モンゴル大草原に人のいない広大さと寂しさを歌う。中国詩にとってはなはだ新鮮である。

◆南宋は金を攻めるためモンゴルと同盟を組んだ。

一二三二年、金の都、汴京はモンゴル軍に包囲され陥落した。金の哀宗は蔡州へ逃れたが蒙古と南宋軍に囲まれ、位を承麟に譲って自殺した。蔡州に入城した南宋軍は金の哀宗を殺した。

この時、元軍は汴京にいた金の太后、皇后、二王、諸妃嬪など宗室の男女五百人あまりを三十七輦の車に乗せて蒙古の首都ウランバートルに送った。途中、蒙古軍の將スプタイは二王と宗属を殺し、道中の状況は惨虐見るに忍びないものがあつた。これを見た詩人は次の如く詠った。

「癸巳五月三日北渡其一」 (癸巳五月三日北に渡る) 金 元好問

道旁僵臥滿累囚 道旁に僵れ臥して累囚満ち

過去旃車似水流 過ぎ去る旃車は水の流るるに似たり 旃車＝幌馬車

紅粉哭隨回鶻馬 紅粉は哭しつつ回鶻の馬に随い 紅粉＝若い女 回鶻＝蒙古軍

為誰一步一迴頭 誰の為にか一步ごとに一たび頭を回らす

道ばたには縄で縛られた囚人たちがごろごろ倒れ伏していた。通り過ぎる幌馬車は水の流れるように続いた。若い女たちは泣き泣き蒙古軍の馬について行く。誰を見ようとして一歩ごとに後ろを振り返るのだろう。

「其二」

白骨縱横似乱麻 白骨縱横乱麻に似たり

幾年桑梓變龍沙 幾年か桑梓龍沙に變ず 桑梓＝郷里 龍沙＝砂漠

只知河朔生靈盡 只だ知る河朔生靈の尽くるを 河朔＝河北

破屋疎煙却数家 破屋疎煙却って数家

「書憤」

(憤りを書す) 南宋 陸游

早歲那知世事難 早歲那んど知らん世事の難きを

中原北望氣如山 中原北望して氣山の如し 中原＝中国中心部

樓船夜雪瓜洲渡 樓船夜雪瓜洲の渡 樓船＝やぐらを組んだ戦艦

鉄馬秋風大散関 鉄馬秋風大散関 瓜洲＝江蘇省の南

塞上長城空自許 塞上長城空しく自ら許せしも 大散関＝金の国境の関所

鏡中衰鬢已先斑 鏡中衰鬢已に先に斑なり

出師一表真名世 出師一表真に世に名あり 出師一表＝諸葛亮のこと

千載誰堪伯仲間 千載誰か堪えたる伯仲の間

金国に淮水以北を占領され、敵意を表すも宋軍のふがいなさを嘆き、老いた自分に憤りを表す。あれから千年、誰が諸葛亮に匹敵するだけのことをなし得たか。

隣国ロシアについて

現在のヨーロッパを構成するラテン、ゲルマン、スラブの三大民族の分布は、五世紀ころにできあがった。

地中海地方はラテン系民族

西ヨーロッパはゲルマン系民族 (牧畜と狩猟の民)

東ヨーロッパはスラブ系民族 (農耕の民)

ただし、ハンガリーとフィンランドだけがウラル語系の言語をもっている。両国はマジヤール人（ハンガリー人の自称）・フィン人というアジア系の遊牧民を祖先としている。マジヤール人の居住地はウラル山脈からボルガ河あたりであった。

ゲルマン人はラインとドナウ河兩岸から北の地域にいた北方民族である。

バルト海やユトランド半島（デンマーク）の森林沼沢地帯を居住地にして牧畜と狩猟をしていた。ゲルマン人はしだいに南下して、紀元前後のころライン・ドナウ川を境にローマ帝国と接触するようになった。ゲルマン人の大移動を引き起こした間接原因は土地不足であるが、直接原因はアジア系遊牧騎馬民族の**フン人**の圧力であった。

フン人は四世紀後半に、南ロシアの草原を西進した。このころ黒海北岸に定住していたゲルマン人（東ゴート人とよぶ）を服属させた。このため西ゴート人はドナウ川を渡って大挙してローマ領内に侵入し保護を求めた。これ以後、二百年にわたってゲルマン人の大移動（南下）が続くのである。ゲルマン人のいなくなった後に、北からスラブ人が入り込み定着する。

スラブ人は東ヨーロッパを占める人々であるが、歴史に登場してくる時期はもっとも遅く、文献上では六世紀である。スラブ人の故地は現在のウクライナ西部とポーランド東部から北の地域といわれている。スラブ人は七世紀初めより、この地からゆっくりと平和裏に（武力を待たなかった）近隣に広がっていった。これはスラブ人が農耕民族であったためである。ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人（これらは東スラブ）、ポーランド人、チェコスロバキア人（これらは西スラブ）、セルビア人、クロアチア人、ブルガリア人（南スラブ）などがそれである。

六世紀にはスラブ民族の周りは、西にフランク王国（首都パリ）、南にビザンツ帝国（東

ローマ帝国」が栄えていた。

スラブ人の中でも、キエフを中心としたキエフルーシを形成したのは六世紀後半の東スラブ人および北欧のスエーデン人、ノルマン人と混血した人々である。

これが現在のロシア人、ウクライナ人、およびベラルーシ人の先祖となる。ルーシ人である。

（ルーシとは、ゲルマン民族の一派であるノルマン人を意味し、九世紀にスエーデンからバルト海を渡ってきて、二百年間にわたり活躍し、ヨーロッパ各地に国を建設し、スラブ人、バルト人、フィン人を支配し同化した種族で、ノルマン人は東ヨーロッパ、さらにフランク王国を襲い、イギリスを征服、イタリア南部、シチリアに王国を建設した。バイキングと呼ばれた）。

スラブ人は、八六二年ノブゴロド国（サンクトペテルブルク付近のノルマン人とスラブ人が混血した人々）、そして八八二年にキエフ公国を建国した。（これが最初のロシア国家である）

ルーシから派生した後のロシアと区別するため「キエフを都としたルーシ」という意味で、キエフルーシを共通の源流としているのが慣例となっている。

この国は九〜十一世紀にわたり、ヨーロッパ最大の版図を誇った。公国の王は娘をフランス、ノルウェー、ハンガリー王国に嫁がせるだけの力を持っていた。

◆一二三四年、チンギスハンの第三子オゴタイは金を滅ぼした後、首都カラコルムの全部族会議で、ヨーロッパ遠征を決定した。

一二三七年には早くもウラル山脈西の今のタタリスタンにあったブルガル人の国を征服し、翌年にはルーシ諸侯を滅ぼしていった。モンゴル軍はつづいて北コーカサス、ウクライナの首都キエフを占領して（一二四〇）、ポーランド王国に入りポーランド軍とドイツ騎士団連合軍を粉砕した。つづいてハンガリー王国、オーストリア、クロアチアまで進軍してアドリア海岸に達した。モンゴル軍はとくに、都市を徹底的に破壊した。そして、一二四三年にキプチャク汗国（首都はボルガ河下流のサライ）を建国し、地元の諸侯を間接統治した。

（現在はキプチャク汗国をジョチ・ウルスと呼ぶのが普通。征服軍を率いたのは、チンギスカンの孫 ジョチ家の次男バトゥである。ウルスとは一族・国家という意味である。バトゥの部隊は一五〜二〇万人の規模）

バトゥはルーシの諸侯をサライの宮廷に召喚し、臣従の礼をとらせた。応じなかったミハイル公は殺害された。モスクワ侯は小国であったが、キプチャク汗国のカンに臣従して朝貢と納税をしながら、近隣諸侯との内戦で、カンの援助を得て領土を拡張、一三二五年イワン一世がモスクワ公国として、カンから独立を承認された。モンゴルが来なければモスクワ公国になることは出来なかったと言われる。

一四世紀になると、モンゴルの汗国同士が争いをはじめ、キプチャク汗国で政変が生じ、北にカザン汗国、南にクリミヤ汗国などが独立して五つに分裂した。

このとき、モスクワは大公国として承認された。

そして、モスクワ大公国へのカンの圧力が弱まったので、イワン三世はカンに対し出頭も納税もしなかった。カンはモスクワに十万の軍隊を送ったが、モスクワ大公国はクリコボの戦いでモンゴル軍を退けるなどして国を守り切った。

一四八〇年イワン三世は、皇后を毒殺してからビザンツ帝国（東ローマ帝国）最後の皇帝の姪と結婚して、ツァーリ（皇帝）を名乗りモンゴルから自立して、キリスト教国となった。ロシアでは、これまで支配された二百四十年間を「タタールのくびき（軛）」と呼んでいる。タタールという呼び名は、もともと元を中国から追い出した明が、北に退却した北元を滅ぼすことができず、北元は相変わらず旺盛であったが、元と呼ばずに韃靼（タタール）と呼んでいたからである。

一五〇二年クリミヤ汗国が、キプチャク汗国を滅ぼした。

モスクワのイワン四世（雷帝）は農奴制を強化し、諸侯、大貴族を弾圧するなど中央集権的なツァーリ専制を築き、ロシア帝国の基礎を固めた。雷帝とは恐怖政治の意味である。

キエフは長い間リトアニア公国に属していたが、ロシア領となったのは一六五四年である。ロシアという言葉は、国名としては、それまではルーシ国家であって、イワン四世の時からロシア帝国となったのである。 「ロシアはいかにして生れたか 宮野裕 NHK出版」

◆十五世紀、西欧でムスケット（火縄式激発装置銃）が発明され、またたくまに普及した。

この小銃こそ遊牧国家を終わりにさせるものとなった。

騎馬民族のタタールの弓は小型であるが、日本の弓とは異なり、動物の骨を薄く削ってまず薄板をつくる。その薄板を幾重にも縛着して作り上げ、ちょうど列車の懸架ばねと似たような物理的構造と力をもっていて、ばねの力が実に強かった。馬上疾走して走る獣を射て、百発百中という彼らの道具は生活の基本に根ざしていたため、遊牧民族の国家（汗国）の人々はそれを捨てて銃に替えることはできなかったといわれる。

モスクワ公国のイワン四世の武力の中心は西欧から輸入した銃となった。馬上操作を容易にするため火縄の代わりに歯車式発火装置が用いられた。そして銃兵隊を創設した。

イワン四世の成果の一つにシベリア進出がある。（シベリアの語源はシビル汗国にある）大公はコサック部隊など一五〇〇人余りの軍勢でカン国の首都を攻撃した（一五八一年）。一四八〇年キプチャク汗国の支配が終わり、さらに一六四〇年、シベリアのブリヤート遊牧

民がロシアのコサックに征服されるのも銃によってであった。

そしてバルト海から太平洋までのシベリヤ・カムチャツカ半島・アラスカの領土を獲得した。
(この時、日本は徳川三代将軍家光のころである)

(日本の種子島にポルトガル人が漂着して鉄砲をもたらしたのは、ムスケット銃の発明から百年後の一五四三年で、織田信長が積極的に導入した)

アラスカは一八六七年、米国に七二〇万ドルで売り渡している。

ウクライナについて

ウクライナ人とロシア人とは文化的に似ているが、国家観は異なる。そのことを端的に示すのが国歌である。ロシア国歌は「聖なる我らが強国」「力強い意思、偉大な栄光」、大国・強国意識を示すのに対し、ウクライナ国歌は、ウクライナ人が自由を尊ぶコサックの血を引くことを強調し、「自由のために身も心も捧げよう」と、敵を撃退して自分で国を治める決意を謳う。

キエフルーシ公国はほぼ全域にわたって単一のルーシ民族であったものが、モンゴルによって十三世紀半ばに国が滅亡してから三百年間、ウクライナの地にはウクライナを代表する政治権力は存在しなかった。この間はリトアニアとポーランドがウクライナを支配した。

この期間中にロシア、ウクライナ、ベラルーシの三民族に分化したのである。そして分化の原因はかつてのキエフルーシ公国がこの時代に、モスクワ大公国、ポーランド王国、リトアニア大公国となり長期に固定されたことである。言語もロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語という独立した言語になった。

十三世紀中頃、ここの大平原を支配していたモンゴルのキプチャク汗国も十五〜十六世紀初めには解体してクリミア汗国などいくつかの汗国に分裂した。

これらの汗国に服属しないモンゴル系のタタールなどの遊牧民が跳梁し、ルーシ人の町や村を襲って奴隷狩りを行うようになって、この地帯はますます過疎化した土地になった。

例えば一四五〇〜一五八六年に八十六回のタタールの襲撃があったと記録されている。

◆これに備えて自衛組織が生じ、ルーシ人は武装して組織を作っていた。彼らは武力を身につけると、今度はタタールを襲うようになった。家畜を盗み、トルコ人やアルメニア人の隊商を襲った。またクリミア汗国やドナウ河口地帯のオスマントルコの町や村を襲った。彼らがタタールと異なるのは、キリスト正教の擁護者を任じ、ウクライナ人の保護、クリミア汗

国で奴隷にされていたルーシ人を解放することも熱心だった。こうした者たちがコサックと呼ばれた。

コサックという言葉はトルコ語で「分捕り品で暮らす人」あるいは「自由の民」を意味する。遊牧民のタタールと戦うコサックは始めスラブ系の人であったが、困窮農民やユダヤ、トルコなどの人も加わった。

コサックは自由と自治権を主張して活動したため、国としては扱いにくい集団でもあった。コサックは徐々に国王からも認められ、国家の組織となつてゆく。タタールやトルコと戦い、またモスクワ公国やオスマントルコ帝国との戦争に出動して頼りにされた。コサック兵は戦争には、騎兵として参加し、命を惜しまず勇猛な軍団であった。

コサックはドニエプル川を中心に平時には町や村で家族とともに農業を営んでいた。しかし銃や剣は手放さなかった。服装は亜麻布製の長袖上着、だぶだぶのズボンと革製の長靴、頭には毛皮の帽子をかぶっていた。髪は一房に毛を残して剃っていた。これはタタールの風習を真似たものといわれているが、アジアの遊牧民満州族の弁髪にも通ずるものがある。

十七世紀、ポーランドとモスクワがウクライナをめぐつて戦争をした後、条約を結びウクライナを分割した。これによりコサックの自治権は弱められた。

十七世紀末、モスクワではピョートル一世（大帝）が中央集権国家をつくり、スエーデンとの戦争に勝利（ウクライナはスエーデンに加勢して戦った）して強国となった。

十八世紀にロシアの女帝エカテリーナ二世（ドイツ人）は、ウクライナのコサックの自治組織を廃止しロシアの強権下に従わせた。ロシアは敵対していたトルコと条約を結び、戦争のために必要とされていたウクライナ・コサックは必要なくなった。この条約締結により、クリミヤ汗国（南ウクライナとクリミヤを統治した）は孤立無援となった。

一七八三年、エカテリーナの寵臣ポチョムキンが、クリミヤの首都バツチサライを攻略してクリミヤ汗国は滅亡した。

このことは、スラブ民族の遊牧民族に対する最後の勝利であった。ロシアは全クリミア半島を領有することになり、ポチョムキンが領主に任じられた。エカテリーナはこれまで一三〇年間にわたり、ウクライナを支配してきた小ロシア参議会（ロシアはウクライナを小ロシアと呼んだ）を廃止してロシアの県とした。

このあと、西ウクライナを支配していたポーランドは貴族の権力が強くなり、王権が弱くなつていった。隣国ロシアとプロイセンが絶対王権の下で強国にのし上がってきて、ポーランドはロシア、プロイセン、オーストリアの三国に分割されポーランドも消滅した。その後ウクライナの独立闘争は幾度も試みられているが成功しなかった。

第一次大戦とロシアのボリシェビキ革命は、ロシアと東欧の地図をすっかり塗り替えた。ロシアではニコライ二世の退位により帝政が倒れ、ソ連（ソヴィエト社会主義共和国連邦）という新しい国家が生まれた。

レーニンの死んだあと、スターリンが権力を掌握した。六年間にわたる第二次世界大戦のあと、スターリンが死んでフルシチョフ、ブレジネフ時代を経て、ゴルバチョフがペレストロイカ政策（共産党独裁廃止・統制経済の緩和・情報公開）を進めて、停滞していたソ連邦の維持に努めるが、これに反対する保守派は一九九一年にクーデターによって、クリミアの別荘で休暇中のゴルバチョフを拘禁した。

しかしロシア共和国大統領のエリツィンが迅速に軍隊を動かしてクーデターを失敗させた。同時に共産党を解体した。ゴルバチョフはソ連を解体して、独立国家共同体（SIS）の体制を創設した。しかし、彼はソ連経済を衰退させたと批判され、エリツィンと交代した。

この時、民族自決の原則に従いソ連・旧ロシア帝国の支配下にあったリトアニア、ラトビア、エストニア、フィンランドのバルト北欧諸国が独立し、オーストリア・ハンガリー帝国下のポーランド、チェコスロバキア、ハンガリーも完全独立を果たした。（ソ連は建国六九年で終了した）

ところがウクライナは独立運動に絶大な犠牲を払ったにもかかわらず、独立できなかった。これはロシアもウクライナの豊かな土地と工業・農業の生産力抜きでは国家が成り立たないとして、ロシアはウクライナとベラルーシと独立国家共同体（CIS）を締結した。

ウクライナは山岳が無く、国土は平原か耕地であり、ヨーロッパのパン籠と言われるほど穀物の収穫量が多い。国土の面積はロシアを除いて、ヨーロッパ最大である。

ウクライナの独立宣言はおおいに遅れて、一九九一年十二月末であった。二十世紀になって六回目の事であって、それ以前の五回の独立宣言は長続きせず、ロシアに潰されていたのであった。

その理由は、ロシア人を大ロシア人、小ロシア人（ウクライナ）、白ロシア人（ベラルーシ）という三位一体の大民族であるとするロシア帝国期の考えが底流にあったからである。四半世紀近く経った二〇一四年、ロシアはロシア系住民の多いウクライナ共和国のクリミヤを併合した。ウクライナはCISから脱退を表明。ロシアのプーチン大統領は、二〇二二年にウクライナに侵攻し戦火が続く。

「物語ウクライナの歴史 黒川裕次 中公新書」

「ロシアは何をめぐってウクライナ・米欧と対立しているか 宇山智彦 学士會会報 九五五号」